

身心ともに健康に

熟語を間違えた訳ではありません。普通は「身心ともに」と書くべきところです。でも、私たちの幼稚園では「身心ともに」健康な子どもたちを育てたいと思っているのです。

「心身」の「心」とは何でしょうか。子どもたちに身につけてもらいたい「心」は「素直さ」「くじけない心」「優しさ」「思いやり」そんな心です。では「心身」の「身」とは何でしょう。「頑丈な体」「病気をしない体」「健康な体」を意味します。そんな「心」と「身」が高いレベルで融合している人が理想的です。そして確かにその両者はどちらが欠けてもならないものです。でも、今、この幼児期においては、まず「身」を鍛えて「心」を次の段階に期待するべきだと私たちは考えています。

「学問のすすめ」という著作で有名な福沢諭吉は「まず獣身を為してもって人心を植えよ」と言っています。「(幼児期では)まず獣のような頑強な体をつくるのが大切である。その後、人としての心を植え付けていくのがよい。」という意味です。少し意外な言葉かも知れませんが、学問で身を立てた福沢のことですから「一に勉強、二に勉強」というのかと思えば、「勉強のことは放置しておいてまずは体を鍛えよ」と言っているのですから。

実は、福沢自身、14歳になるまで一切の勉強はしなかったと書いています。初めて「勉強しようかな」と思ったのが14歳の時で、最初の師であった白石常山の下で勉強を始めた時は、ずっと年下の子どもたちに混じって大きな体で座っている自分が恥ずかしかつたと書いています。しかし、あつという間に学問に目覚め、少し後には先生も驚くレベルに達していたそうです。福沢は、その後、緒方洪庵という師に出会い、洪庵が主宰する「適塾」の塾長になり、1858年には江戸に出て自分で蘭学塾を始めます(これが慶應義塾の始まりです)。

私たちは福沢の故事に倣って、まずは頑強な体をつくる、そのためには私たちの幼稚園では元気に遊ぶことが大切だと考えています。幼稚園という子どもたちの楽園で思う存分遊ぶ、力一杯遊ぶ、まず子どもたちに幼稚園のことを大好きになってもらい、幼稚園に来ることが楽しみになってもらい、そして

幼稚園では思い切り遊ぶ。それが大切だと思っています。

そして、頑強な体を作った後に、人としての心「素直な心」「くじけない心」「優しい心」「思いやりのある心」を十分に育て、それからやっと勉強に入っていくべきだと考えています。

遊んでばかりいると小学校に入ってから勉強についていけなくなる、と主張する方がいます。それは真実でしょうか。私たちはそれは間違いではないかと思っています。確かに学科の勉強は、将来、必ず役に立つことです。でも、それは、幼児期の今、やるべきことでしょうか。

私たちは、時間をかけて教えれば、子どもたちは大人がびっくりするようなことができることを知っています。漢字教育、フラッシュカード、私が真似できないようなことまでできるようになります。いろいろなことをどんどん教えられて、とても高いところまで到達しているお子さんに出会うことがあります。少し感心してしましますが、私はそんなお子さんたちを見る度に、計画なしに積み上げられたブロック塀を想像してしまいます。基礎もなく鉄筋も十分に入っていないブロック塀は少しの地震で簡単に崩落してしまう危険をはらんでいます(今年、残念な事故がありました)。そんなブロック塀が、地震ならぬ「挫折」や「失敗」で脆くも崩れ子どもたち自身がその下敷きになってしまうことを想像するだけで寒気がします。まずは勉強を受け止めるだけの頑丈な体をつくり、そこに、挫折しても失敗してもくじけない、そんな強い心を身につけることが肝要です。

私たちの幼稚園での教育の基本理念もそこにあります。頑丈な体をつくり、人としての心を育て、それから勉強への道を歩む。これが正しい順序ではないでしょうか。でも、保護者の皆様の中にはこの順序を誤って覚えている方が多いのではないかと、そう考えるのは私だけでしょうか。